先輩の作文と体験記

1〔教師になってやってみたいこと〕

「教師になってやってみたいこと」

（家政学部被服学科　平成22年３月卒業）

私が教師になってから早くも４ヶ月が経とうとしています。中学３年生の頃から教師という職業に憧れていましたが、実際に教師になると今までの想像を超えた、日々感動の連続です。

授業のエプロン作りでは、慣れない手つきでも一生懸命ミシンを使い、真剣に刺繍のデザインを考えている姿を見ると嬉しくなります。座学とは違う実習の良さは、近くで生徒と接しコミュニケーションがとれる事です。そのため、早く信頼関係が生まれお互いに親しみやすくなります。私は出来るだけ生徒との距離感を大切に、授業を行うようにしています。その中で、「先生」と言って来たり、「家庭科って面白い」という生徒の何気ない行動や言葉が教員にとって一番の力となり、やりがいを感じる瞬間でもあります。

家庭科とは、とても生活に密接している教科のため、生徒のこれからの生活に少しでもプラスになるような授業をするよう心掛けています。

様々な面を見ていて感じることですが、生徒一人一人個性があり良いものを持っているのでこれからの成長がとても楽しみです。

今、授業の他に部活動の顧問や大学入試の小論文講座も担当しています。これからも、授業だけで満足せず積極的に様々なことに取り組み、生徒に信頼されるよう自分自身を高めて行きたいと思っています。

教員が生徒に与える影響はとても大きく重要なため、少しでも生徒の今後の人生の糧となりプラスになるような後押しが出来たらと思っています。そのためにも、いつでも生徒の立場に立ってものごとを考え、厳しさの中にも温かみのある指導をしていきたいと思います。

そして、今後「この先生に出会えて良かった」と生徒の心に残るような教員になることがこれからの私の目標です。

「学び続けていく教師」

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成22年３月卒業）

「小学校の先生になりたい！」

小学校の卒業文集に書いてから早10年、私は今、小学校の教壇に立っています。

４月から７月までの約４カ月間、クラスでは毎日色々なことが起き、１つ１つ丁寧に解決し、きめ細かい指導を胸に日々駆け抜けてきたつもりですが、振り返ってみると反省ばかりで、本当に子どもに申し訳ないと感じています。

それでも、『うちの子、先生のこと大好きって言っていますよ』と、やんちゃで普段から私に叱られてばかりの子どもの保護者から言われたり、私が午後から出張で学校を出るときに『先生行ってらっしゃい！』と正門まで子どもたちが見送ってくれたり、『先生大好き！』と抱きついてくれるあの子たちを見たりすると、嬉しくて嬉しくて涙が出てきます。

クラスで嬉しいことがあったときは一緒に笑い、喜びました。クラスで悲しいことがあったときは、一緒に泣きました。

どの子も自分の気持ちを素直に表現できていることが、本当に嬉しくて心地いいクラスだなと思います。

教師は子どもに悩まされ、子どもに救われる毎日なのだと日々感じています。

「先生」は子どもにとって、学校を卒業したあとも、何年、何十年たっても、ずっと「先生」です。子どもは「先生」から言われたさりげない一言を、いつまでも覚えているものです。それほど教師は子どもにとって大きな存在であり、影響を与える存在であります。だからこそ教師は「聖職者」とも呼ばれるのです。

私は学生時代、教師になる「までの」努力をしてきました。そうして教師になった今、私は教師になって「からの」努力として、日々精進していかなければならないと感じています。子どもの一生に影響を与える存在、「聖職者」とも呼ばれる教師は、学び続けていく人であってこそ、人にものを教える権利を持っているのだと思います。

これからも、顔施・打座即刻の心で職務に励み、決して驕ることなく、常に子どもとともに学び続けていく教師でありたいです。

教師になって４ヶ月、やってみたいこと

（文学部英文学科　平成22年３月卒業）

教師になって４ヶ月が経ち、生徒の様子や学校の動きにも少しずつ慣れ、毎日忙しいながらも充実した毎日を過ごしています。

さて、「教師になってやってみたいこと」ですが、私は教師になる前から「楽しみながらできる授業」を理想として、それを実現したいと思っていました。しかし、現場に立ってみると簡単なことではなく、自然に楽しく身につけてもらいたいという意図で行うアクテビティーも面倒に思う生徒や、授業中に何度起こしても眠っている生徒、ノートもとらずただ机に座っている生徒など、私が目指している「楽しく生徒が意欲的に取り組む授業」という以前の問題で、生徒の授業への姿勢に悩まされていますが、一方で現状を実感できたと納得したという点もありました。

そこでこれから、この現状を踏まえて自分にはなにができるのか、どうすれば生徒が「もっと知りたい」と感じ、自発的に学ぶようになるのかということが、これからの私の「教師になってやってみたいこと」に繋がるのですが、それは、授業中はほどよい緊張感で、私が教室に入ってきたらすぐ授業をする態勢になったり、集中して授業を聞いたりとごく当たり前のことを生徒に身に付けてもらうことです。授業中、一言も話させないという厳しく息苦しい授業にするのでは意味がないと思います。そうではなく、生徒の「自発性」を引き出したいと思います。今の時点で私ができることはテンポよく授業をし、生徒の理解度を把握し、それに合わせた授業を展開することです。

とてもちっぽけなことだと思われてしまいますが、教師になる以前と教師になってからの「やってみたいこと」は大きく変わったと思います。全員が授業に集中しないのは仕方ないことだからと手を抜くことはいくらでもできると思います。しかし、授業を受けている生徒の50分間を無駄にしてはいけないという思いをいつまでも持っていきたいと思います。何年もキャリアを重ねれば、また「やってみたいこと」は変わってくると思いますが、これが教師になって４ヶ月の私のやってみたいことでもあり、目標でもあります。

『教師となって第一歩』

（家政学部食物学科食物学専攻　平成29年３月卒業）

私は４月から、晴れて憧れの教師になります。教壇に立ったら、生徒が「家庭科って面白い。」「家庭科は必要！」と思える授業を日々していこうと思っています。

家庭科は衣食住の知識や技術だけでなく人の一生・自身の生き方などについて学び、生きていく中で必要不可欠な教科です。家庭科の楽しさを伝えるために、教科書を見るだけの平面的なものではなく、実物を見せたり生活の身近な話を取り入れたり、教師の一方的な授業ではなく生徒が主体となって考えたり話し合う授業を工夫していこうと思います。また、家庭科は被服や調理の実習があるため生徒との距離を縮めて個別の指導をし、生徒に「できた！」という喜びを経験させたいです。

高校生という時期は自分のこれからの人生を意識しながら成長していくので、授業を通して生徒が自分の生き方や人生を見つめることができるようにしていきたいと思います。

また、生徒とのコミュニケーションを大切にしていきたいと考えています。教育実習などを通し、教師の忙しさを

知りました。忙しくてあまり生徒と関われないという場面もあるかもしれませんが、忙しい中でも生徒と過ごす時間を大切にし、ひとりひとりの生徒を理解していこうと思います。教育実習やボランティア経験などを通して、実際の生徒と「先生」として関わり、生徒にとって教師の影響力はとても大きく重要なのだと実感しました。教師のはたらきかけが生徒の変化や成長に大きく関わっていくことを常に頭に置き、「生徒にとって何が一番良いか」を考えて、行動していきます。

４月から正式に教師として教壇に立ちます。期待と不安で溢れています。生徒のことを第一に考え、生徒ひとりひとりの気持ちを理解し、生徒の心に寄り添っていける教師を目指します。そして、私自身も生徒と一緒に学び続けていく教師になることを目指し、精一杯頑張っていきます。

「教師になってやってみたいこと」

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成29年３月卒業）

私は子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になれる教師になりたいです。

なぜなら、私は小学校３年生まで友人関係が上手く築くことができず、何事にも消極的でした。そんな私に担任の先生が「あなたはみんなを引っ張っていける力を持っているのだから、もっと自分に自信を持ちなさい」と言って下さいました。自分自身が気づいていなかった新たな私の長所を見つけて下さった先生との出会い。私はこの先生との出会いのおかげで人生が大きく変わりました。この恩師との出会いにより、「私は将来教師になり、今度は私が子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になりたい」と思ったからです。

大学生活を通して、子どもの可能性を引き出すためには、どうしたら引き出せるのか常に考えながら学んできました。大学の授業やボランティアでは、多くの小学校に行き、たくさんの先生方や子どもたちと触れ合うことができました。そんな中で、素晴らしい先生の授業をみる機会を得ました。その先生の授業は、初めて見た時から子ども一人ひとりをきちんと理解されているのがとても伝わってくる授業でした。授業を受けている子どもは、どの子も一心に考え、のびのびと発言し積極的に学んでおり、45分の授業はとても短く感じるものでした。45分集中して学ぶことができるのは、教師がこの授業で一人ひとりに何を身につけさせたいかが明確に考えられているからだと思いました。そのため、授業が終わった後「どうしてあの場面でＡくんを指したのですか？」と質問しても、その子の背景まで理解された返答が返ってきました。子どもに確かな学力をつけるためにも、誰に何を聞かれても理由が述べられる授業作りをすることで、子ども一人ひとりに合った授業をすることができるのだと改めて確信しました。子どもの新たな可能性を引き出してあげるためにも、教師は日頃からあらゆる場面で子どもとコミュニケーションをとり、児童の背景までも理解していくことがとても大切だと思います。

今の世の中の子どもたちは、未来が不透明であり、夢を持つことや目標を持ち突き進んでいく意欲が持ちづらい世の中になってきています。だからこそ私は、子ども一人ひとりと正面から向き合い、児童一人ひとりを理解し、６年間の中で多くの経験をさせ、その中で自分では気づいていない新たな可能性を引き出してあげたいです。教師は、１日の中で長い時間子どもと関わることができます。だからこそ、一人ひとりを知ることができ、新たな可能性を見つけ引き出してあげられるのだと思います。その子にとって出会った先生は、一生先生です。一人でも多くの子どもの可能性を引き出し、未来を生きる力になれる。そんな教師を目指したいです。

「教育実習を経験して」

（千葉県　市立中学校）

私は母校の中学校で、５月に家庭科の教育実習と９月に栄養教諭の教育実習をさせていただきました。

家庭科の教育実習では、家庭科の指導案を何度も書き直し、授業の教材作成や調理実習の材料購入、道徳の授業計画、生徒との交換ノートのようなもの、部活動指導、清掃指導、放課後のパトロール、実習録の記入など、やるべきことがたくさんあり大変でした。しかし、「生徒にこんなことを学んでほしい」や「生徒の学校生活をより豊かにするためには何ができるだろう」ということを考えると何事にも懸命に取り組むことができました。

私は、実習で難しいと思うことがありました。その１つが話し方です。「もっと声の大きさやスピードにメリハリをつけなければ最も伝えたいことが分からなくなってしまう。」と指導していただき、注意して話したつもりではありましたが、簡単には改善することができませんでした。２つめに時間の使い方です。特に調理実習は時間が予定通りに進まないことが多く、臨機応変に対応する難しさを痛感しました。さらに、空き時間が全くない日、生徒との交換ノートのようなものの記入は休み時間で終わらせるべきだったのですが、終わらせることができず、生徒総会の時間を使わせていただいてしまいました。

このような私に対しても、先生方はとても温かく指導をしてくださいました。学級経営の指導をしてくださった先生は、放課後の時間を使って、実習初日から生徒一人一人について教えて下さり、他の日には教室の提示についてや今まで出会った先生方のお話など、とても多くのお話をしてくださいました。教科指導の先生は、午後から出張であっても夜７時ころに学校へ戻り指導をしてくださいました。また授業の参考にと、様々な資料を用意して下さいました。

先生方や生徒のおかげで、とても充実した実習になりました。いつか教員となり、実習で得たものを生かしていきたいと思います。

（家政学部食物学科食物学専攻　平成24年度教育実習）

『教育実習での経験』

（東京都　区立中学校・国語）

私は都内の公立中学校で教育実習を行いました。母校ではなかったので実習に行く前に教育目標や学校の概要に目を通すなど、実習校について調べることから始めました。

実習が始まるまでは不安がありましたが、始まると毎日新たな学びがあり、大変なことがありながらも楽しい日々を送ることができたと感じています。また、実習期間中に運動会があり、学校行事の運営についても学ぶことができました。

実習中主に行っていたことは、授業見学、授業準備・授業、朝と帰りのホームルーム、教室の清掃、担当クラスの連絡帳の確認・コメント記入、担当クラスの学級日誌の確認・コメント等です。また、コロナウイルス感染拡大を防ぐための体調チェックに参加させていただく日や、部活動の見学をさせていただくこともありました。

授業を行う中で難しいと感じたのは、クラスの雰囲気によって授業での発問の方法や作成した副教材の進め方を少しずつ変えることです。授業内容を変えてはいけませんが、積極的に発言があるクラス、自ら発言する生徒が少ないクラスなど、クラスの雰囲気は様々なので発問の投げかけ方などに工夫が必要でした。毎回授業後に先生からアドバイスを頂き、次第に感覚が掴めるようになっていきました。

授業作成以外の面では、授業を担当するクラスや毎日のホームルームを担当するクラスに限らず、出来るだけ多くの生徒を見ることが大切だと感じました。私の担当教科は国語ですが、初日に校長先生から「自分の担当授業だけで

はなく様々な教科の授業を見学すること、様々な部活動を見学することで新たな発見がある。」というお話があり、英語や社会、数学、理科、音楽などほとんどの教科の授業を見学しました。様々な授業を見学することで先生方の授業の構成や進め方のみならず、自分が授業で担当している生徒の他の授業での様子が分かり、自分の授業での接し方を見直すきっかけにもなりました。

実習初日から最終日まで、指導教員の先生方はもちろん他教科の先生方も親身になって指導してくださり、とても充実した日々を送ることができました。これから実際に教員として教壇に立つときも教育実習での経験を活かして励んでいきたいと思います。

（文学部日本文学科　令和４年度教育実習）

教育実習を終えて

（埼玉県　市立中学校・英語）

私は、母校の中学校で教育実習に参加させていただきました。三週間の実習は、大変有意義で充実したものとなりました。教科指導と学級指導の二つの視点から、実習について振り返りたいと思います。

教科指導については、主に三学年の外国語科の授業に入りました。第一週目は英語での自己紹介や部分指導を、第二週目から第三週目にかけては授業実習を行いました。また、第三週目には外国語科と特別の教科道徳の研究授業を行いました。三学年は五クラス編成のため、外国語科の授業が数多く設定されていました。そのため、入る授業数も自ずと多くなり、とても勉強になりました。特に、クラスごとに学級の色があることを実感し、目の前の生徒の実態に合わせて指導をしていくことが大切だと改めて思いました。また、空き時間が一日につき一コマあったので、先生方にお願いをして、三学年の他教科と他学年の外国語科を中心に授業見学をさせていただきました。授業見学をすることで、外国語科の授業では見られなかった三学年の生徒の姿を知ることができてよかったです。加えて、同じ外国語科の授業でも、各学年の発達段階を踏まえて、扱う教材やワークシート、指導の仕方、声のかけ方を変化させていることがよくわかりました。担当した三学年の生徒は、日が経つごとに主体的に授業に参加してくれる姿が多く見られるようになりました。生徒がよく授業を聞く姿、生徒からの自発的な挙手や質問等、その全てが嬉しかったです。

学級指導については、教科指導と同じ指導教諭の先生についていただき、その先生が受け持つ三学年の学級に入りました。第一週目から生活記録の点検を行い、第二週目以降は朝の会や帰りの会、給食指導なども行いました。学級指導では、生徒と様々な手段で積極的に関わることの大切さを学びました。休み時間や下校指導時において生徒と話すことはもちろん、生活記録でコミュニケーションをとること、朝の職員会議前に黒板に挨拶を書くこと等、一つひとつの生徒との関わりがよりよい信頼関係の構築に繋がると感じました。特に、何気なく書いていた朝の挨拶について、ある先生から「黒板の挨拶を消そうとすると悲しそうな反応をするから、なかなか消せなかった。」と聞いた時には、胸がいっぱいになりました。実習の最終日には、生徒から色紙をプレゼントしていただきました。色紙は、机の上に飾っています。一生ものの宝物です。

三週間の教育実習を終えて、教職への憧れと夢を叶えたい気持ちがより一層強くなりました。私のことをあたたかく迎え入れてくださった母校の生徒の皆さんと熱心にご指導してくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。教育実習を通して学んだことを将来に活かせるよう、今後も励んでいきたいと思います。

（文学部英語英文学科　令和４年度教育実習）

教育実習で見えたもの

（東京都　市立中学校　理科）

教育実習の３週間は、生徒と実際に関わることができるからこその楽しみと不安が常に入り乱れるような日々でし

た。

教科指導では、１回の授業で教える量、クラスを巻き込んで授業をどう盛り上げるかが特に難しいと感じました。何度も模擬授業を大学でやってきたとはいえ実際に30人の生徒を目の前にすると、身が引き締まる思いでした。自分では分かっている内容を、初めて学ぶ人に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いのか。１回の授業で扱う量のさじ加減は大事なことはもちろん、その時間内での緩急の付け方はクラスの盛り上がりにもつながります。あるクラスでうまくいったからと言って、全クラスでうまくいくとは限りません。クラスの雰囲気に合わせた微調整は難しいですが、がっちりとはまったときの達成感は大きかったです。

また、毎時間一言でもその授業について振り返りをさせることは、生徒の理解度が見えてくるだけでなく、自分自身の授業の進め方を考えるきっかけになりました。

生徒指導では単純に注意をするだけでは終わらせず、その先、生徒が自分から考えて行動できるようにするたに何をすべきか、ということを意識していました。状況に合わせた声のかけ方や、毎回同じにならないようにするにはどうしたら良いかなど、瞬発力と思考力が同時に試される瞬間でもありました。３週間という短い期間の間でも、自分の声のかけ方次第でクラス、学年の雰囲気がだんだんと変わっていくのを実感したときは自分が発するひとことの重さはもちろん、教員の面白さを垣間見られたように感じました。

研究授業の終了後、それまでの授業とはまた違った緊張から解放された安堵感で涙がこぼれた時、教科指導の先生にかけて頂いた「それはこの期間、生徒に全力で向き合ってきた証拠」という言葉は、不安に思うことが多かった私にとって自信につながるものでした。教育実習は毎日が刺激的で、現場に行くからこそ見えるものに全力で取り組んだ日々は、一生忘れられない経験になりました。

（社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻　令和４年度教育実習）

「教育実習の流れ」

（埼玉県　市立小学校）

教育実習では、まず１番に体力が重要となります。実習中は、７時頃に家を出て、帰りは早くても、５時くらいとなります。それまで動き続けます。座る時は給食を食べる時だけの時も、多々ありました。

１日の流れは、【朝の準備→朝の会→１時間目から４時間目→給食→掃除・お昼休み→５．６時間目→帰りの会】という流れでした。

「朝の会」

基本的に、朝の会の前の宿題チェックから入りました。何日か経ち慣れてきたところで、朝の会を任せてもらえるようになりました。朝の会は基本的に「短く・わかりやすく」を意識しました。朝の時間は忙しく、１時間目の授業が迫っているので少しでも早く終わらせることができるように心掛けていました。

「授業」

授業では、はじめは机間観察を行います。その中で困っている児童や、つまずいてしまっている児童にアドバイスなどを行います。教室の後ろに立ち、どのように授業が行われているのかを常にメモしていました。この時に板書も大まかに書いておくと、参考にできるのでおすすめです。

実際に授業をさせて頂く時には、なるべく担当クラスの流れを大切にしていました。その先生、そのクラスのやり方があるので授業の流れを日々注目します。また、流れを担当教員に確認するなど事前準備を必ず行うことが大切です。自分が前に立ち授業を行った際に、児童が理解出来ていないようだったら無理に進まず、少し戻ってみたり、少しヒントを出したりとゆっくり行う時間も意識しました。

「休み時間」

思っているほど、児童と過ごすことは出来ませんでした。実習のはじめの方は過ごせることもありましたが、授業をさせて頂く時はその授業準備に時間を使ってしまうことが多く、遊べる回数が減ってしまいました。しかし、隙間時間を見つけ、児童とのコミュニケーションを取ることを意識することは毎日心掛けました。休み時間は、本気で遊んで問題ありませんでした。児童も本気で来てくれるからです。一緒に楽しい時間を過ごすことが出来ました。

「給食・掃除」

児童と一緒に行うことができる時間なので、積極的に動くことを意識しました。この時間はみんなと一緒に全力で用意や片付け、掃除を頑張ります。

「帰りの会」

全員をしっかり見送ることが大切だと改めて気がつくことが出来る時間でした。

帰りの会の後は、教室の整理整頓、明日の予定の確認、授業準備など学校によって流れは違いますが忙しいという印象があります。

このような流れになっています。

学校の先生にたくさんのことを学ぶことはもちろんですが、児童から学ぶこともたくさんあります。先生方に頼り、たくさん聞くことは本当に大切です。わからないことはそのままにせず、すぐに聞くことが大切です。時には児童からアドバイスをもらうということもしました。

４週間とはじめは長く感じるかもしれませんが、慣れてくると本当にあっという間です。頑張ってください。応援しています。

（家政学部児童学科児童教育専攻　令和４年度教育実習）

3〔介護等体験〕

５日間の介護等体験は、普段の生活では学ぶことのできない貴重な体験をすることができ、充実した時間を過ごしました。

私が体験を行った施設は、障害のある方が働く作業所でした。普段の生活では、なかなか障害のある方と関わる機会がありません。はじめはどのように接したら良いのか不安でいっぱいでした。しかし実際に施設へ行ってみると、利用者の方々は明るく元気に私たちを迎え入れてくださいました。

初日はコミュニケーションをとるのに苦労をしましたが、徐々に慣れていき、相手の話にしっかりと耳を傾け、相手の気持ちになって考えることにより、今何がしたいのか、何を自分に言っているのかがわかるようになりました。そうすると、よりスムーズに一緒に作業をすることができるようになりました。５日間緊張もしましたし、大変なこともたくさんありました。しかし得たものも多く、体験を通して人とのかかわりをより大切にするようになったと思います。

介護等体験を終え、改めてたくさんの人と関わる教員という職業を考えることができました。この経験を活かし、教員を目指して頑張ろうと思います。

（家政学部被服学科　平成22年度〈社会福祉施設〉）

私は二年生のときにデイサービスセンターに５日間、三年生のときに特別支援学校に２日間、介護等体験に参加した。デイサービスセンターではお年寄りの方々が日帰りで１日お話しをしたり、入浴、体操などをして過ごしている。私は、そうして毎日いらっしゃる方々の話し相手をしたり、昼食の準備をしたり入浴後の髪をドライヤーで乾かしたり、一緒にゲームに参加したりした。また納涼祭の季節だったので盆踊りや、お祭りで配るしおりや飾りの作成などを一緒に手伝った。

特別支援学校では小学部と中学部が一緒の学校の小学部１年生のクラスに入った。特別支援学校は、通常の学校にはない自立の時間などがあり、着替えや一日のスケジュールを理解するなど、生活の仕方を学ぶ時間が多かった。また文化発表会の時期だったので練習とリハーサルにも参加した。児童によってさまざまな個性（障害）があり、走り回ってしまう子や一つのことをやりだすとなかなかやめられない子などいたが、教員の方々は一人ひとりに合わせた接し方をしていた。二日間という短い期間では授業内容を把握したり、技術的な部分を学ぶことはなかなかできなかったが、児童との交流はよく取れたと思う。

介護体験にいって思ったことは、デイサービスセンターでも特別支援学校でも、安全の確認を第一に行う中で一人ひとりに合わせた対応をしているということだ。またそのためには日常のコミュニケーションからその人がどんな支援が必要なのかと云うことを見極めることを重視していると感じた。そしてそれは専門の知識がなくてもできることだ。確かに排泄・入浴や昼食介護などは、専門の知識や資格が必要であるので私には何も出来ることがなかった。しかしコミュニケーションをとったり、危険かどうか注意して見ることはできるので、自分からもとにかくたくさん関わりを持つことを心がけた。

（文学部日本文学科　平成22年度介護等体験〈社会福祉施設〉
平成23年度介護等体験〈特別支援学校〉）

「介護等体験を通して学んだこと」

私は介護等体験として、２年生の時に福祉センターの中にある障がいのある方が仕事訓練をする施設に５日間行きました。３年生の時には、特別支援学校に２日間行きました。

①福祉センター

私は、就労継続支援Ｂ型の方が仕事する場所に配属になりました。就労継続支援Ｂ型という言葉をはじめて知りました。介護等体験の前に何も知らないままで体験を行うことは、失礼と考え、障がいについてのことや就労継続支援Ｂ型について様々なことを調べていきました。５日間の体験内容は、施設利用者の方と、福祉センターが請け負っている割り箸の袋詰めをしたり、センターが経営しているパン屋さんの掃除をすることでした。また、お昼休みには昼食を一緒に食べました。話をするときは、話をする、仕事をするときは仕事をするという、施設利用者の方にメリハリをつけるのが難しかったです。この活動を通して、プラスの声かけというのを考えながら関わることが大切であると学びました。

②特別支援学校

現場でしか、体験することができないことをたくさん経験することができました。普段の生活の中で障がいがある方と接する機会は、ほとんどありません。前日は大変緊張しましたが、当日は充実した日になりました。

特別支援学校とは、名前は知っていましたが、どのような学校なのかよくわかりませんでした。私は、体験前に必ず特別支援学校とはどういう学校なのか、どのような障がいがあるのかというのは、きちんと調べておいたほうがいいと思います。そして、当日、担任の先生にクラスの生徒がどのような障がいがあり、どのような接し方をすればいいのかアドバイスを聞き、先生と介護等体験生との、情報交換を綿密にすることをおすすめします。生徒は、介護等体験生であっても、先生という認識をしています。先生が、不安がっていると、生徒も不安がってしまいます。私が経験したことでいうと、１日のスケジュールがしっかりしていないと活動ができない生徒がいました。私が、１日のスケジュールを把握していなかったため、生徒が「次、何をしますか？」という質問に私がすぐ答えることができなく、不安にさせてしまったことがありました。あの時私ができたことは、おどおどするのではなく、黒板に１日のスケジュールが貼ってあるので、一緒に見に行こう！という声かけができればよかったと思いました。一つの言葉であっても、視点を変えて、プラスの言い方に変えていく力が大切であると思いました。

最後になりますが、必ず目標を立てて、介護等体験に挑むことが必要です。私は、①「発語がない方でも、諦めずにコミュニケーションを取る。」②「施設利用者の方や生徒が１人でできることは、最後まで手を出さずにやり抜くまで見守る。」③「どんな時でも笑顔で明るく！はきはきと！」というこの３つを目標に掲げて、２つの介護等体験を行いました。いろいろなことを頑張ろうとすると、自分が大変になります。五感を働かせて、たくさんのことを吸収してください。現場の辛さ、楽しさなど、様々なことを経験することができます。

文学部英文学科　平成27年度介護等体験〈社会福祉施設〉
平成28年度介護等体験〈特別支援学校〉

4〔教員採用試験〕

「いつでも自分の心にとどめておきたい気持ち」

（千葉県・中高・家庭）

「教員になろう」と初めて思ったのは、確か中学２年生だったと記憶している。憧れる恩師はいたものの、将来について色々な大人に聞かれ、「教員」なら皆が反対しないだろうと思って口にしていた節もあった。それでも言霊とは怖いもので、大学受験も教員免許が取れるかどうかで選び、教職課程もなんの迷いもなく選択して日々の授業をこなしていた。大学３年生の冬までは。

大学３年生の冬休みになり、友人の周りにも就職への不安がまとわりついてきたころ、私にも将来について考えなければならない時期がやってきた。はっきり言って、教員になることは、普通に就職するよりも茨の道であることは一目瞭然だった。そんな中、特に熱い思いのない私が教員になってやっていけるのか、様々な不安が頭をよぎった。その時に考えたことは、これからの自分の姿である。教員として働く自分と、一般企業で働く自分、どちらに胸が高鳴るかを考えたとき、学校で働く自分の姿がとても輝いて見えた。採用試験を受けようと思ったのもこんな些細な気持ちがきっかけであった。

採用試験を受けようと決めた瞬間から、就職の道は諦めた。就職求人サイトは全て消した。今思えば、「教員になる」という固い決意を、自分に言い聞かせるためだったのもしれない。ここからは、怒涛の日々が待っていた。人生で最も勉強した期間だった。

専門教科の勉強では過去問の繰り返しが最も効果的だった。選択問題の場合、誤文はどこが違うのか、違う場合は正しい回答を調べる。更にそこから考えられる予想問題を自分で作る。このサイクルでずっとやっていた。教職教養は、問題運もあるのでやりづらいが、教員になるうえで知っておいて損のないことばかりである。試験のためではなく、今後の自分のための勉強だと思えば私も集中して取り組めた。面接や論作文なども様々な方に御指導をいただきながら、コツコツ取り組んでいた。最も大切なことは、自分の得意不得意を分析して、勉強計画を立てること。得意を伸ばすか苦手を克服するかは、その時の自分と相談してください。

また、日々で心の支えになったのは一緒に勉強していた友人の存在だった。採用試験を受ける地域も、実習先も全員が違ったが、同じ目標に向かって助け合った友人がいたからここまで頑張ることができたのだと思う。ぜひ高め合える仲間を作ってください。

採用試験は受験を決めた日から合格するその日まで、不安が付きまとうでしょう。きっとやめたくなることも逃げたくなることもあるはずです。私は、採用試験に合格した今でも自分が教員に向いているのかを考えてしまいます。しかし、採用試験に合格することがゴールではありません。そこからがスタートです。まずは、自分に「なぜ教員になりたいのか」を聞いてみてください。どんな小さな気持ちでも、きっとここから先の心の支えになってくれるはずです。私も採用試験に臨むことを決めたあの時の気持ちを忘れずに、４月からの教員生活を楽しみたいと思っています。どこかで一緒に働ける日を楽しみにしています。

（家政学部被服学科　令和５年３月卒業）

「未来の同僚の皆さんへ」

（新潟県・小学校全科）

「３月28日」忘れもしない、わたしが教員採用試験対策の勉強を始めた日である。春休み明けのガイダンスの日、「もう４年生か…」などと安易に考えていた私の目に飛び込んできたのは、参考書や問題集を眺めるクラスメート達の姿だった。そこから、私の教員採用試験対策が始まった。後輩の皆さんには、私のような失敗をしてほしくないの

で、僭越ながら、以下に２点のアドバイスをしたい。

１点目は、勉強をする覚悟をすることである。「教員採用試験は時の運」とよく言われるが、最低限の学力がなければ運を味方につけることさえできない。私はまず、自分が集中して勉強できる場所（私の場合は大学）を見つけ、そこにこもって１冊の問題集（セサミノート）をひたすら繰り返した。ただ、私の失敗は最後まで受験する県を決められなかったために、オールマイティに勉強するしかなかったことである。もっと早く受験する県を決めていたなら、それだけ早くその県の傾向に合わせて勉強することができたと思う。実際に勉強して実感したことだが、その県によって絶対に出題される問題や全く出題されない問題などがはっきりしている。すべてを頭に入れる必要はなくピンポイントに勉強すれば、解くのは問題集の３分の１程度でよい。

２点目は、小論文や面接の指導をしてもらえる人を見つけることである。一人でコツコツ問題を解けばよい勉強とは違い、小論文や面接は適切な指導者がいなければ対策を立てることができない。私は、大学の先生や理科支援員としてお世話になっていた小学校の校長先生などに指導していただいた。指導していただいているうちに、小論文や面接に関しては得手不得手よりも練習量だと痛感した。論文の形式をつかむまでは書くよりほかにない。面接で語れるだけの教育経験を積むには、様々なボランティアをするなどして経験するしかない。大学生活で自分が語れる引き出しをたくさん作り、それをうまく引き出してくれる指導者に協力してもらうことが大切である。

このように考えると、自分が非常に大層なことを成し遂げたかのようだが、担任として子どもたちを預かる立場となった今振り返ると、試験対策だけで努力していると感じていた自分が恥ずかしい。それだけ、クラス担任は忙しく辛いことも多い。しかし、その辛さを遥かに凌ぐほどの喜びがあるからこそ、「学校の先生」はやめられない。

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成22年３月卒業）

「夢に向かって」

（東京都・小学校全科）

小学生のときからの夢。それは、"小学校の先生"になることであった。大学に入ったばかりの頃は、教育実習も教員採用試験もまだまだ先のことだと考えていた。実際に、自分自身が小学校現場に入ることや、教員採用試験を受けることのイメージすらもてなかった。しかし、大学生活はあっという間に過ぎるもので教員採用試験の勉強をする時期にきてしまった。はじめは、何から勉強して良いかわからず、先輩にどんな本を使ってどのような方法で勉強したのかを聞きそれを参考に始めた。いざ始めると、あまりの出来なさに「本当に受かるのだろうか。」という不安で一杯になった。また、同時進行で卒業論文もあったので両立してやることが難しく、どちらかに偏ることもあった。問題集には、あらゆる分野のことが載っており、一つ一つ解いていくのがとても大変だった。そんなときに、大学の先生が「過去問を解くと良い。」というお話をしてくださった。過去問なら、一回に解く量が限られているし実際に過去に出た問題となるとやる気も湧き出てきた。しかし、解いてみるとやはり合っている数よりも間違っている数の方が多かった。間違えたところは、すぐにやり直し同じような問題を問題集から探して繰り返し解いた。何回か過去問を解いていくうちに、同じような問題が出ていることや自分が苦手な分野に気付くことができた。それからは、大学で友達と一緒に励まし合いながら勉強をした。互いに辛いときもあったが、一人じゃないと思えたので頑張ることができた。また、一次試験には小論文があり私の大の苦手であった。自分の中で小論文の対策法を考えないと合格しないという思いがあったので、とにかく量をたくさん書こうと思った。また、大妻中野高等学校の校長先生が小論文の対策法を講義でやってくださり、約１ヵ月に一回のペースで添削をしてくださった。毎回ご指導をしてくださることで、次への課題に活かすことができた。

二次試験の面接は、集団面接と個人面接であった。面接の練習は、一人ではできないので先生に練習をしていただいたり、友達何人かでテーマを決めて討論したりした。採用試験当日はとても緊張したが、笑顔と明るさだけは忘れずにおこなった。そして、面接官の目を見ながら聞かれたことに対してハキハキと答えることを意識した。また、面

接は日頃の自分の思いや考えが表れるので、「自分はどんな教師になりたいのか。」「子どもたちとどのように関わっていきたいのか。」ということを考えておくことが必要である。そして、学校の中では様々な場面に出くわす。そんなときも、慌てずに対応できる柔軟性を身に着け、アピールできることが大切だと思った。

教員採用試験を受ける前は、本当に受かるかどうか不安な気持ちで一杯だったが今私は、東京都の教員として毎日子どもたちと過ごしている。大変なこともあるが、それ以上に楽しいこともありこの仕事について良かったと実感する日々である。

（家政学部児童学科児童教育専攻　平成21年３月卒業）

教員採用試験を終えて

（群馬県・中学・理科）

私は、群馬県教員採用試験を受けました。そして合格することができました。学生の私にとって、採用試験に合格することが試験勉強を行う上での目標でした。しかし、合格した今の私は目標を達成することが出来たと同時にここからがスタートであると感じています。

私は高校生の時から教師になりたいと考えていましたが、いざ就職にむけて進路を決め始める頃は、自分が本当に教師になれるのかと不安を感じ、決心するまで心のどこかで迷っている部分がありました。しかし、理科実践演習の講義などを通して理科の教材を作る楽しさや、普段の生活の中でも授業に使えるような写真は撮れないか、話題はないかなど探すようになり、先生になって沢山の生徒に理科の楽しさを教えたいと強く感じるようになりました。

教育実習では実際に生徒と関わり合い、生徒との接し方や授業を行う上での工夫などを学びました。生徒と関わっている時間はとても楽しく毎日が充実していました。３週間を終えたときには絶対教員になると思いが強まりました。

試験勉強はとても長い期間でしたが、最後まで気持ちを切らさずやってこれたのは、教師になりたいという強い気持ちと、それに加えて私が一人ではなかったからです。多摩キャンパスの理科教職のメンバー、千代田キャンパスの同じ教員を目指す仲間がいたから私は最後まで勉強を続けることができました。受験は団体戦だとよく言いますが、この意味を初めて理解することができた気がしました。先生方には様々なことを指導していただきとても感謝しています。

私の今の目標は、残りの学生生活を充実させるとともに４月から教壇に立つ立場としてしっかりと勉強して、準備をしておくということです。今からが私のスタートです。

（社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻　平成29年３月卒業）

教員採用試験を通して

（東京都・中高・家庭）

私は、来年度から東京都で家庭科の教員として働きます。４年生になる前の春休みから始まった私の教員採用試験合格への道のりは、長いようで、あっという間でした。私の体験記が、これから教員を目指す皆さんの参考になれば、背中を押すことにつながれば幸いです。

私は小さい頃から教員になろうと思っていたわけではなく、大学に入学して、教職課程を履修していくうちに、家庭科の教員を目指すようになりました。入学当初は単純に服が好きで、将来も服に関わる仕事がしたいと漠然と考えていました。しかし教職課程を履修していくうちに、家庭科を学ぶ楽しさを感じるとともに、自分自身が中高生の頃にこの面白さを知りたかったな、今の中高生に家庭科を教えたいなと思い、教員という仕事が視野に入るようになりました。

生徒の人生に影響を与える、非常に責任のある教員という仕事を目指す上で、自分が本当にできるのか、他にも沢

山の職業がある中で、本当に教員でいいのかとたくさん悩みましたが、人生で一度やってみたいと思ったなら挑戦しようと思い、教員を目指す覚悟を決めました。

実際に教員採用試験の対策を始めたのは３年生の授業が終わった２月からで、ともに教員を目指す友達と毎日勉強をしました。一次の筆記試験は、勉強すればするほど新しい知識が出てきて、焦ったり不安になったりすることも多々ありました。しかし友達がいたからこそ励まし合えたし、勉強を続けることができたと感じています。４年生になると授業が再開し、卒業研究も進めなければならないし、教育実習も始まるので、精神的にも体力的にも疲れてしまうことがありました。そのような時も、私は一緒に教員を目指す友達がいたから頑張れました。これから教員を目指して頑張ってみようと思っている人がいたら、ぜひ仲間を見つけて、一緒に頑張っていくことをおすすめします。

また、教職総合支援センターの先生方には非常にお世話になりました。センターで筆記試験の勉強をしていた時もあるし、二次試験の面接練習、模擬授業、指導案の対策など、親身になって指導してくださいました。時には、不安な気持ちを聞いてもらって、励ましていただいたこともありました。先生方に指導していただいたおかげで、私は来年度から教壇に立つことができます。本当にありがとうございました。

今教員を目指している人、教員になろうか迷っている人、様々いると思いますが、自分とよく向き合ってたくさん悩んで、自分の人生を決めていってほしいと思います。そして教員を目指そうと思う人は、ぜひこれからの時間を乗り越えて、素敵な先生になってほしいです。一緒に頑張りましょう。応援しています。

（家政学部被服学科　令和５年３月卒業）